

途切れさせぬ平和への道

師勝中学校 三年 南 文菜

私は、八月六日の六十九回目の「原爆の日」に、北名古屋市の平和啓発事業の一環として、原爆で亡くなられた方々の慰霊と世界恒久平和を願う「広島平和記念式典」に参加しました。

六十九年前、八月六日の八時十五分。広島町は一瞬にして地獄となりました。いつもと変わらない朝を過ごすなかの原子爆弾の投下でした。その爆弾は人々の身体に多大な悪影響を及ぼす放射線、何千度にも達する熱線、建物を一瞬にして破壊する爆風を発生させました。人々の皮膚は焼けただけ、衣服は焦げてポロポロになり、建物の割れたガラスが身体中に突き刺さりました。やけどを負って水を求める声が街中に飛び交い、道にはあふれる死体の山。被爆者の誰もが、「当時の光景はまさに地獄絵図だった。」と語ります。

私は二年前にも広島に行ったことがあり、今回が二回目です。広島平和資料館に行くのも二回目ですが、二回目の訪問ということと、授業で知識を得たことで戦争について無知だった二年前よりも、今回のほうが落ち着いて戦争の恐ろしさに目を向けることができました。しかし、受けたショックの大きさは変わりませんでした。全身にやけどを負った人の写真、亡くなった人の焼け焦げた遺品、突き刺さったガラスの跡が無数に残るコンクリートの壁、原爆の悲惨さを物語る被爆人形がありました。とても痛々しく、見ている胸が締め付けられ言葉になりませんでした。

政府が今年七月、「集団的自衛権」の行使を容認することを閣議決定したことで、今年の式典は例年とは雰囲気異なり、どこか緊張感が漂っていました。「平和宣言」は、それにはあえて触れず、ただただ「核兵器廃絶と武力ではなく未来志向の対話ができる世界平和実現」が強く訴えられました。私は命や大切なものを破壊することしかできない武力には、憎しみや悲しみしか存在しないと思うので、世界中の国が核兵器を持たず、調和することで、恒久世界平和への道が開けると信じます。そして、世界唯一の核被爆国に暮らす私たちは、慰霊碑に刻まれる「過ちは繰り返しませぬから」の言葉を決して忘れず心に刻み、身近な場所の戦争体験を調べたり、広島・長崎を実際に訪ね、目と耳で感じることで、戦争を風化させない努力をしていく必要があると思います。

現在被爆者の平均年齢は七十九歳を超えていて、減少の一途をたどっています。今後は私たちが、過去の戦争に真剣に向き合い、核兵器の恐ろしさや、平和の尊さ後世に伝えていく「覚悟」が必要だと思います。

私も、今回、実際にヒロシマで「見て、聞いて、感じた」ことを多くの人達に伝えていきたいです。―守り続けられた「平和への道」を途切れさせないように―。

広島が私に教えてくれたこと

西春中学校 三年 朝倉 唯

「……。」

何も言葉が出ませんでした。八時十五分で止まった時計、皮膚が溶けてしまった人間、真つ黒になった弁当……。私は忘れられません、資料館で見たあの光景を。今の日本では考えられない悲惨な光景が辺りに広がっていました。

私は、先日「広島平和記念資料館」を訪れました。そこでは、自分の目を疑ってしまうような信じられない光景を目の当たりにしました。今まで感じたこととの無いような恐怖、憤り、そして原爆の恐ろしさを身を以って痛感しました。

一九四五年八月六日。広島に原子爆弾が投下されました。三メートルという小さな原子爆弾が、広島という大きな都市を一瞬にして破壊してしまったのです。たった一発の原爆で。

私は、戦争について、ある程度知っているつもりでした。戦争により、多くの被害が出たことも、日本が負けたことも、そして原爆が落とされたことも……。しかし、自分の目で見て、聞いたものは、私の想像をはるかに超えたものでした。うまく言い表すことはできませんが、衝撃的で大きなショックを受けました。戦争についての話を聞けば聞くほど恐ろしさ、悲惨さが伝わってきます。その当時の方の気持ちを考えると、胸が締めつけられるほど苦しくなります。何の罪も無い多くの人が、命を落としてしまう戦争を私は決して許しません。

戦争は、何もかも奪ってしまいます。幸せな暮らし、大切な人、そして明るい未来さえも……。戦争からは悪しか生まれません。多くの人を傷つけ、憎むことしかできないのですから。

八月六日、私は平和記念式典に出席しました。そこには、多くの人が参列し、一分間の黙とうを捧げました。今の平和な日本があるのは、当時の方々の努力のおかげです。過酷な状況の中、生き抜き、復興のために力を注いでくれた方がいたからこそ私たちは今、こうして平和に暮らすことができているのです。そんな方々に「感謝」すると同時に、その方のためにも、「二度と戦争はしない」という強い思いを胸に生きていきたいと思えます。

日本は世界で唯一の被爆国です。原爆の悲惨さを全世界へ伝えていかなければいけません。今回、私は平和の使者として貴重な体験をさせていただけたことをとても感謝しています。そんな今の私にできること。それは感じたこと、体験したことを多くの人に伝え、広めていくことだと思えます。六十九年前のあの日の事実を私たちは決して忘れてはいけません。

二度と同じ過ちを繰り返さないために。そして、一日も早くこの世界から戦争が消え、誰もが平和に暮らせる日々のために。

六十九回目の夏

白木中学校 三年 梶川 智史

一九四五年八月六日、その日広島には青空が広がっていました。人や車、電車が行き交う、いつもの町の姿がありました。しかし、その日常は長くは続きませんでした。午前八時すぎ、たった一発の原子爆弾によって全て破壊されたのです。

僕が平和の使者として訪れた広島には、当時の信じられない光景が残されていました。

今でも忘れられません。広島平和記念資料館で見た懐中時計を。その時計は原爆の熱風を受けたその瞬間を境に二度と動くことはありませんでした。この時計の持ち主の、そして広島の間が一瞬にして奪われたことを物語るかのようには、はがれた皮膚をだらんと垂らして逃げ回る人々の写真。彼らには無数のガラスのかけらが突きささっていました。怖いとは思いませんでした。怖さで怖さを忘れてしまった、そんな不思議な感覚でした。

広島から帰ってから僕は前に読んだ本に出てきた櫻美一郎くんという男の子のことを思い出しました。彼ら広島二中の生徒はその日、広島市内の建物を壊す作業のために川の土手に集まりました。原爆が落とされたのは皆が整列し終わった直後だったそうです。爆発の後「お父さん、お母さん。」と叫ぶ友達を、「大声を出すと早く弱るから叫ぶな。」となだめた櫻くん。なんとか家に帰れたものの、八月十一日午前八時十分、お父さんに、大好きだった軍歌を歌ってもらい、それを聞きながら亡くなりました。彼の誕生日は八月六日、原子爆弾の落とされたその日でした。櫻くんの死によって、広島二中一年生、三百二十二人と四人の先生は全滅しました。

なぜ彼らは死ななければならなかったのでしょうか。彼らが死ななければならぬ理由なんて一つもなかったはずです。しかし、原爆は広島二中一年生の、広島市民の命を無差別に、そして理不尽に奪っていきました。

あの日から六十九回目の八月六日、僕たちは広島市原爆死没者慰霊式・平和祈念式に参加しました。八時十五分、黙祷をささげている間、この二日間で見えてきたいくつもの展示が思い出されました。長くて短い一分間は静かに過ぎていきました。

この二日間で僕は原爆の悲劇について知らないことが多すぎると身をもって感じました。今回の事業で気付いたこともほんの一部にすぎないでしょう。ただ、日本は世界で唯一、原爆の被害に遭った国です。だからこそ僕たちには原爆について、そして平和とは何か、考え続ける責任があります。そして、小さなことでも行動していく義務があります。世界中の人々が安心して暮らせる世界を目指していくためにも。そして、もう二度と「水をください、助けてください。」という言葉を聞くことのない星にするために。

平和の使者として

訓原中学校 三年 森川 帆奈

六十九年前の八月六日午前八時十五分。たった一発の原子爆弾で広島町は変わってしまいました。八時十四分までの生活と思いい出の全てがたった一発の原子爆弾によって奪われたのです。

私は八月の五日、六日に市の平和の使者派遣事業で広島に行きました。

一日目、資料館で見た物はとても現実とは思えませんでした。八時十五分で止まった懐中時計。熱線によって人の影が黒く残った石の階段など、どれも目を背けたくなくなってしまふような物ばかりでした。私がここで最も印象に残っている展示は真つ黒になつたお弁当箱です。このお弁当箱に込められた話を何年前かに読んだことがあります。その時には物語の中の話という気持ちで読んでいました。

物語の主人公はあの日の朝、いつも通りに学校へ向かいます。それを見送る母。その後変わり果てた姿で見つかった主人公とお弁当箱。資料館には、物語に出てきた物と同じような真つ黒になつたお弁当箱がありました。それを見た時に、もしこの場において、同じように原爆の被害にあつていたらどうなつていただろうと。たった一つのお弁当箱を見ただけで色々な思いがわいてきて胸が強く締めつけられました。

一日目にもう一つ私が印象に残つたのは、平和祈念・死没者追悼空間です。この場所は原爆死没者を静かに追悼し平和について考える場所です。入ると中央には水盤、周りには爆心地からのパノラマがあり、その下には被爆当時の広島地域の名前があります。何気なく見ていましたが、それぞれにきちんとした意味がありました。中央の水盤は八時十五分を表し、水を求めて亡くなった方々のために水を捧げているなど、この場所では、心を落ちつけて静かに平和について考えました。

二日目には、平和記念式典に参加しました。四十三年ぶりの雨の式典となり、空も泣いているようでした。現在の広島は六十九年前の原爆投下から見違えるほど復興しています。しかし被害を受けた人々の傷は永遠に癒えることはないでしょう。

こども代表の力強い平和宣言。式典を見守る原爆ドーム。献花の時にずっと手を合わせている人達。そんな光景を見てみると戦争が起こした原爆の悲惨さに涙が止まりません。日本は唯一の被爆国です。六十九年経つた今それを語り継いでいく人は少なくなっています。平和の使者として私達が広島へ行った事の意味。それは自分の目で見えて心で感じた事を未来へ伝えていく事です。原爆の恐ろしさと、戦争の悲劇を私達の言葉で伝えていかなくてはいけません。私一人では小さな力かもしれませんが、この二日間で得た貴重な経験を生かして、二度とこのような悲劇が起こらない平和な世界を作っていきたいと思えます。

平和への思い

熊野中学校 三年 兼松 明日美

想像してみてください。原子爆弾の恐ろしさを、戦争の悲惨さを。

一九四五年八月六日の午前八時十五分。全ての警報が解除され、人々はみないつも通りの暮らしを送っていました。すると突然人々の目には白く、鋭い光が突き刺さり、ドカンというものすごい爆音がしたそうです。辺りを見回すと、真っ黒に焦げて逃げる姿のまま死んでいる人。からだ中にたくさんガラスが刺さり苦しんでいる人。全身の皮膚が焼けただけ、長い手を前に突き出し、とぼとぼとさまようが如く歩く人の姿が。想像するだけで身の毛がよだちます。しかし、そこには私たちの想像を絶する光景が広がっていたのです。

平和記念資料館にはそんな生々しい現実が数多く展示されていました。その場に身を委ねると、たくさんの行き場のない悲しみがどっと押し寄せてくるように胸が締め付けられました。

今年で戦後六十九年が経ちます。それでもなお、生き残った人でさえ深い悲しみや怒り、憎しみ、後悔の思いなどを抱えているのだとも感じました。あの戦争が、原子爆弾が、たくさんの苦しみや悲しみを生みました。私たちは今、歴史を見つめ直さなければなりません。

広島では原子爆弾が落とされた八月六日、長崎では九日に平和授業のため毎年登校日になっているそうです。広島やが長崎の子供たちは、より戦争や原爆を身近に感じていると思います。はたして私たちはどうでしょう。そこには大きな温度差があるように感じます。だからこそ被爆体験を自分の耳で聞き、原子爆弾の恐ろしさや戦争の悲惨さを学び、体験がなくても「想像」することが大切なのではないのでしょうか。そして、これからの私たちにできることは何なのか。それは広島市長の平和宣言にもあったように、「若い人たちが世界に友人を作ること」「戦争文化ではなく、平和文化を作っていく努力を怠らないこと」つまり、国籍や人種、宗教などの違いを超え、人と人との繋がりを大切に、未来志向の対話ができる世界を築かなければいけないということです。

蝉時雨の炎天下のなか原子爆弾は落とされました。そして、今年の平和記念式典では四十三年ぶりに雨が降りました。その雨は被爆者の悲しみが涙であふれ、そして日本の未来を心配するかのよう私には感じられてなりませんでした。

被爆者の平均年齢が七十九歳を超えた今、私たちはその方々から実際に話を聞ける最後の世代だと言われています。そのことをしっかりと認識し、私たち自身、そして私たちの子供、私たちの孫へと語り継いでいくこと。この世界から核がなくなり、争いのない温かい日常が流れる、平和のために……。

あたりまえという幸せ

天神中学校 三年 江口 葵

一九四五年八月六日午前八時十五分。この瞬間広島にいた人、建物、すべてのが吹き飛びました。当時の広島は大きな城下町だったため、たくさんの人が行きかう中、空襲警報が解除され、皆穏やかな生活を送っていました。そんな時突然原子爆弾は襲ってきたのです。

私は平和の使者として、初めて広島を訪れました。最初に訪れた広島平和記念資料館では、数多くの悲惨な光景に愕然としました。ぼろぼろになった制服、黒こげになったお弁当、八時十五分で止まった時計……。中でも私が一番印象に残っているのは、焼けた三輪車とヘルメットのような帽子です。当時幼かった子どもと母親が楽しく遊んでいる。こんな日常的なほほ笑ましい生活、そして健やかに育っていくはずだった子供の未来が一瞬にして散ってしまった。この事実を受けとめようとするだけで、胸が痛みました。

もう一つ私が心を打たれたのは、被爆者の一人、佐々木禎子さんの生涯です。二歳の時に被爆した禎子さんは、十年後に白血病と診断されました。容態が悪くなり、入院しても回復を祈り折り鶴を折り続けましたが、なくなってしまうしました。私もし禎子さんの立場だったら、白血病と分かった瞬間泣き崩れ、生きる気力がなくなってしまうでしょう。そう考えると、最期を迎えるまで自分の意思を固く持ち続けることができた禎子さんは、本当に強く偉大な方だと思いました。また、禎子さんが折り続けた千羽鶴には大きな意味が込められていることも知りました。現在、その中の一羽がアメリカの真珠湾ビクターセンターで展示されています。私はこの鶴が世界恒久平和、核兵器廃絶を訴え、日本とアメリカの平和の架け橋になることを願っています。

その一方で今も尚、いたるところで内戦や紛争が起きています。それらの武器として、恐ろしい核兵器が使われ、罪のない女性や子どもまでもが亡くなっています。一日でも早く平和な世界を訪れることを祈っています。

原爆投下後、日本でもたくさんの方が「水をください。」と訴え苦しみながら亡くなっていきました。また、たくさんの方々がお心に傷を負いながら、立ち上がり、復興へと力を注いでくださいました。そのおかげで私たちは、幸せな生活を送ることができています。

みなさんが求める幸せとはなんですか。私はお腹がいっぱいになるまで食べられること、毎日清潔な服が着られること、安心して暮らせる家があることなど、あたりまえの生活が送れることが何よりも幸せだと思います。この生活を「あたりまえ」だと思わず、感謝し、一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。